

BULLETIN D'ÉTUDES DE LANGUE ET LITTÉRATURE FRANÇAISES

N° 23

TABLE DES MATIÈRES

Exposés

À propos de l'emploi argumentatif de la locution adverbiale « au contraire » Masayuki TASHIRO	1
Petrus Ramus et ses idées sur la langue nationale : <i>Liber de moribus veterum Gallorum</i> (1559) et l'illustration de la langue française..... Shizuka KUBOTA	15
Historiens parlant de soi et les <i>Essais</i> de Montaigne : autour de ses jugements sur César historien..... Tsuyoshi SHISHIMI	29
« le propre lecteur de soi-même » chez Marcel Proust..... Kentaro OSHIMA	43
Georges Bataille et la culture médiévale : son intérêt pour l'oralité et l'écho retrouvé dans sa pratique poétique Isao OKI	57
La Poétique de l'« enfance » : sur la lecture bataillenne de Jacques Prévert Sotaro OHIKE	71
La notion de faute dans <i>La Poétique d'Aristote</i> traduite par André Dacier Kana HATAKEYAMA	85
Sur la relation entre la religion et la communauté dans la pensée de Rousseau Junko NISHIKAWA	99
L'osmazôme dans la <i>Physiologie du goût</i> de Brillat-Savarin : sur son origine et son destin Miwa KATO	113
La musique dans <i>Les Cahiers d'André Walter</i> d'André Gide : l'idéalisation et l'effondrement Yukio NISHIMURA	129
<i>L'Empire français</i> à travers <i>Un barrage contre le Pacifique</i> : l'Indochine chez Marguerite Duras..... Minako KONO	143
L'amour et la narration dans <i>La Maladie de la Mort</i> et <i>Les Yeux Bleus Cheveux Noirs</i> de Marguerite Duras Masako AKASHI	157
Sur la communication dans <i>L'Espace littéraire</i> de Maurice Blanchot..... Ryota ITO	171
La narration et la place des femmes chez Jean Genet..... Mari NAKATA	185
Contraintes et quotidien chez Georges Perec..... Yu MAEYAMA	199
Le lieu des effets affectifs : enjeu de la controverse (1966-1970) entre Didier Anzieu et Jean-Pierre Vernant sur l'interprétation d' <i>Œdipe roi</i> Tomoko SATO	215
La lecture derridienne de Lévinas dans « Violence et métaphysique » Kei KIRITANI	229
Résumés	243

Société de Langue
et Littérature Françaises
du KANTO

2014

ISSN 0919-4770

日本フランス語フランス文学会 関東支部論集

第23号

目次

研究発表

フランス語の副詞句 <i>au contraire</i> の論証的な用法について	田代雅幸	1
ベトルス・ラムスの国語意識 ——「古代ガリア人の慣習」(1559)とフランス語顕揚——.....	久保田静香	15
自らについて語る歴史家とモンテーニュの『エッセー』 ——歴史家カエサルについての考察をめぐって——	志々見剛	29
マルセル・ブルーストにおける「自分自身を読む読者」	大 嶋 健太郎	43
ジョルジュ・バタイユと中世文化 ——口語的表現に対する関心と詩作品への影響——	大 木 勲	57
「幼年」の詩学——バタイユのプレヴェール論をめぐって——.....	大 池 惣太郎	71
アンドレ・ダシエ訳アリストテレス『詩学』におけるあやまちの概念について	畠 山 香 奈	85
ルソーにおける宗教と共同体の関係性について	西 川 純 子	99
ブリア=サヴァラン『味覚の生理学』におけるオスマゾーム ——その起源と変遷をめぐって——	加 藤 三 和	113
アンドレ・ジッド『アンドレ・ヴァルテールの手記』における音楽 ——その理想化と瓦解について——	西 村 友樹雄	129
『太平洋の防波堤』から読む『フランス植民地帝国』 ——マルグリット・デュラスのインドシナ——	河 野 美奈子	143
マルグリット・デュラスの『死の病』と『青い眼、黒い髪』における愛と語りについて	明 石 雅 子	157
モーリス・ブランショ『文学空間』におけるコミュニケーションについて	伊 藤 亮 太	171
ジャン・ジュネにおける女性と語り	中 田 麻 理	185
ジョルジュ・ペレックが日常に課す制約	前 山 悠	199
情動的効果の場 ——「オイディプス王」をめぐるディディエ・アンジューとジャン=ピエール・ ヴェルナンの論争(1966-1970年)とその争点——	佐 藤 朋 子	215
「暴力と形而上学」におけるデリダのレヴィナス読解について	桐 谷 慧	229
研究発表要旨		243

2014

ジョルジュ・ペレックが日常に課す制約

前山 悠

はじめに

ジョルジュ・ペレック (Georges Perec, 1936-1982) に特徴的な手法の一つとして、事物の名がただ延々と書き連ねられていく描写を挙げることができるが、これが読者の関心を一切引かないという事態は大いにありうる。例えば小説『人生使用法』(*La Vie mode d'emploi*, 1978) では、何ページかが手仕事向け工具のリストのみに費やされ、また二つの章が、物語の舞台となるアパルトマンの階段に置かれた雑多な物の羅列 (サンダル、咳止めドロップ、煙草入れ、手帳、牛乳瓶等々) に充てられる¹⁾。こうした素朴な事物の長大なる列挙は、この作家が現実の風景を記述する時、読者の気を一層遠くさせるものとなりうる。ペレックはパリの街中を描写したテキストを数多く発表しているが、その一つサン＝シュルピス広場でなされた『パリのとある場所を網羅する試み』(*Tentative d'épuisement d'un lieu parisien*, 1975) においては、車や人の往来が逐一記録されていく。

[バスの] 86番が通過／パイプをくわえ鞆を肩に掛けた2人の男／鞆を肩に掛けパイプをくわえていない1人の男／ウールの上着を着た幸せそうな女性／96番／もう一台96番²⁾

などなど、ペレックはこうした描写を3日間にわたって続け、1冊の本にして漏れなく読者に提示する。同種の実践はラジオ放送としても行われ (「1978年5月19日にマビヨン交差点で見えたものを記述する試み」« *Tentative de description de choses vues au carrefour Mabillon le 19 mai 1978* », 1979)、この時はマビヨン交差点でなされた音声での記録と共に、その結果の集計と内訳が併せて伝えられる。

自動車3287台、うち／自家用車1435台／軽トラック574台／タクシー580台 […]

ベビーカーに乗った赤ん坊11人／肉屋1人／禿げた男5人／髭の長い司祭1人／チョコレートを食べしている女性1人／カスケートを被った男性18人³⁾

これらの試みの対象、そしてその記述結果が、一見どれほどたわいなく感じられたとしても、実際のところそれは決してペレックの意に反してはいない。というのも、ペレックの主眼に置かれているのはまさしく、何の変哲も無く誰の興味も引かない日常の残滓、すなわち彼が「並以下の物事 *infra-ordinaire*」と呼ぶものの記録だからだ。エッセー「何に注目すべきか」(« *Approches de quoi?* », 1973) は、この探求のマニフェストとして、ペレックの企図と問題提起を明示している。

新聞はあらゆることを話題にするが、毎日起きていることだけは扱わない。 […] / 本当に起きていること、我々が体験していること、残りのその他もろもろは、どこにあるのだろう。毎日起きては繰り返すもの、平凡なこと、日常のこと、明らかなこと、ありふれたこと、月並みなこと、並以下のこと、あたりのざわめき、慣れきったこと、それらをどう説明すればいいのだろう。どう問いかけ、どう記述すればいいのだろう。

[...] 我々は「慣れきった物事に」意識せず関わってしまっている。そんなものは問いも答えもたらさず、何の情報も担っていないかのように。もはや反応の条件付けとすらいえず、麻痺してしまっているのだ。 […] これら「ありふれたものごと」についていかに語ればよいのだろう。 […] 意味を、言葉を与えるには、どうしたらいいのだろう。それらがついに、存在するものについて、我々の存在について、語ってくれるようにするために⁴⁾。

この問い——無意識に過ぎ去る日常をいかに語りうるか——への答えとしてペレックが選んだのが、既に見たような列挙による記述だということになる。モーリス・ブランショ、そして後にマイケル・シェリングアが指摘する通り、日常の記述というのは本来逆説に陥りかねない行為であって、「ありふれた日常」は組上に載せた途端に「注目すべき事件」へと変質し、本質的な凡庸さ、自明さ、つまりは日常性それ自体を損なってしまう⁵⁾。ペレックの手法は、この逆説に抗うものと見なせるだろう。分析、文飾、論証を排除し、ただ名指し

続けるということ、それはまぎれもなく、人間社会の根底に埋もれた「並以下の物事」を考えうる限り直截的に記録する試みなのだ。

「私が探し求めるものに関するメモ」(« *Notes sur ce que je cherche* », 1978) において、ペレックは自らの日常の探求を「社会学的」な仕事と定義している⁶⁾。そのようにして他三つの分類、すなわち「自伝的」、「小説的」、そして最もよく知られた、何らかの制約や言葉遊びに基づく「遊戯的」創作——Eの文字を使わない300ページの物語 (*La Disparition*, 1969)、5000文字からなる回文 (« *Palindrome* », 1969)、数々のクロスワード・パズル——と区別する。事実、この区分に沿うように、ペレックの「社会学的」実践は近年、まさしく社会学的な見地から注目を集めるに至った。マイケル・シェリングアやデレク・シリリングの研究書は、現代フランスに興隆した日常をめぐる実践の原点としてペレックを位置づけてさえいる⁷⁾。だが、ペレック自身が自らの仕事の区分を便宜的なものとししか見ていなかったように、この作家の「社会学的」実践の意義を他の文学的創作から分離して汲み尽くすことは不可能だ。それは「並以下のもの」の列挙が『人生使用法』という小説に導入されていることから既に明らかだろう。今日の社会学的な注目の後には作家活動全体を背景とした再検討の時代が来なければならないのであり、本稿はこれに先鞭をつけることを目的とする。すなわち、ペレックの文学的創作は、いかにして彼の「社会学的」実践の基盤をなすのか、そしてその「社会学的」実践は、いかにして後の文学的創作へと還元されるのか。以下でその交響を検証する。

1 アンリ・ルフェーヴルからの継承

始めにペレックによる「日常の社会学」なるものの起点を確認するならば、それは彼の作家活動それ自体の起点に見出せる。最初の刊行作品にあたる『物の時代』(*Les Choses*, 1965) は先述の分類で「社会学的」な仕事に位置づけられており、そしてマルクスからの引用を結びに置くこの小説は、しばしば資本主義システムへの間接的批判として解釈される一面を持つ⁸⁾。その側面に強く影響を与えた存在として、『日常生活批判』(*Critique de la vie moderne*, 1947) の著者であり、ペレックも参加していた「日常」を主題とする研究会の主導者だった、マルクス主義社会学者アンリ・ルフェーヴルが挙げられる。ルフェーヴルが糾弾する社会、すなわち商品が生活を分節し、物欲が日々を方向づけ、購買が人間の使命として課せられているかのような大量消費社会は、ペレックが

後に『物の時代』で描き出すことになる舞台そのものなのだ⁹⁾。この小説の冒頭には豪華なインテリアのおびただしい列挙が見られるが、それは登場人物たちが欲しながら手の届かない物のリストとして、あるいは広告と流行によって求めさせられている物品のカタログとして、その社会を象徴している。

ただ、ルフェーヴルが我々の日常を大量消費社会のシステムから解放すべきだと明確に提唱するのに比べ、『物の時代』においてペレックの率直な政治的・社会学的表明は——この作家による他のフィクション作品の場合と同じく——見受けられない。日常をめぐる問題にペレックが明示的に携わり、ルフェーヴルからの思索の継承をより判然と窺わせ始める機会としては、先述した1973年のエッセー「何に注目すべきか」と、それを軸とした雑誌『コーズ・コムミュヌ』(Cause Commune)での活動を待たねばならない。ポール・ヴィリリオを中心に創刊され、ルフェーヴルを寄稿者に数えるこの雑誌の目的はまさしく、「日常生活の探求に、あらゆる水準で、通常なら見過ごされるか追いやられる襞や窪みに至るまで取り組む」ことだった¹⁰⁾。ルフェーヴルの理論の要点と、ペレックの実践の原点は、この理念に結節する。ルフェーヴルは日常を芸術や宗教といった高次元活動の「残りかす résidu」と呼びながら、同時にその不可欠な源泉と見なした¹¹⁾。同じくペレックは、日常という「残りのもの reste」を記述せねばならない、と我々に言う¹²⁾。「何に注目すべきか」が伝えるように、それらの「並以下の物事」が「ついに、存在するものについて、我々の存在について、語ってくれるようにするために」。

先述の通り、ペレックの実践はパリの街中における往来の記述として具体化する。そこでの「並以下の物事」の列挙は、『物の時代』で見られた高価なインテリアのそれとは全く性質が異なり、いかなる広告的価値も持たず、いかなるメディアも取り上げない残滓の集積なのだ。その意味で、ペレックによる日常の探求は、彼のかつての小説が描く大量消費社会が置き捨ててしまった物事、しかしながら人間活動の根底をなす事象を、拾い集め直す試みなのだとと言える。

2 『場所』からの継承

ただし、その「並以下の物事」の記述は実のところ、当初から「社会学的」な仕事として着手されてきたわけではない。ペレックがパリの描写を開始するのは、『コーズ・コムミュヌ』以前から進められていた、自伝計画の一環とし

てなのだ。

『場所』(Les Lieux)と名付けられたその計画の概要は、次の通りとなる。ペレックはまず、パリの中で自らの人生と強く関連した場所、例えば彼が生まれたヴィラン通りや、戦争で両親を失った後に引き取られたアソンプション通りなど、12か所を選び出す。このそれぞれの場所につき、2種類の描写を行う。一方は「現場の描写」で、ひと月に1か所、つまり1年で全12か所というペースで現地に赴き、そこで目にした事柄を記録する。もう一方は「記憶の描写」で、同じく月ごとに一つの場所について回想し、浮かび上がるいかなるささいな思い出も書き留めていく。したがってここでは、可視的な現実のみならず、記憶に埋もれた「並以下の物事」を掘り起こすことも問われている。そして済んだ描写はその都度、計画が終わるまで見直せぬように封筒に閉じられる。

この2種類の描写の年間スケジュールは、同じ月に同じ場所の描写が重複せぬように、そして年ごとの順序が全て異なるように厳密に調整されながら、延べ12年分にわたって組まれる。全てが予定通りにいけば、12の場所それぞれにつき、12年にわたって積み重ねられた、12の現場の描写と12の記憶の描写が後に残るだろう。そして計画の果てに封筒を開いた時、3種類の変遷が見られることになる、とペレックは言う。すなわち、自らの大切な場所の変遷と、自らの記憶の変遷、そして、自らのエクリチュールの変遷が、そこに跡づけられるのだ¹³⁾。

『場所』の計画は、実際には1969年の開始後わずか数年で度重なる中断を迎え、1975年には決定的に放棄される。そして、ペレックの「社会学的」実践と今日呼ばれているものは、この自伝計画の残骸に再び命を吹き込んだものに他ならない。計画の不調と時を重ね、雑誌『コーズ・コムミュヌ』での活動を開始したペレックは、『場所』とは別の枠組みで新たな「現場の描写」に着手する。最初に言及したサン＝シュルピス広場やマビヨン交差点での記述がこれに該当する。他方、ペレックは自伝計画が残した数々の封筒から、「現場の描写」の封のみを破り、それを次々と発表していく。そして、これら一連のテキストを「パリのいくつかの場所を記述する試み」(« Tentative de description de quelques lieux parisiens »)と改めて総称した上で、それを「社会学的」な仕事として分類するに至る¹⁴⁾。

かくしてパリの街は、自らの過去を語る媒体から、都市の日常を探る舞台へと名目を変える。だが「社会学的」という区分を事後的に与えようとも、ペレ

ックの記述行為で元々問題とされていたのが社会よりも自己だったという事実は変わらない。これをふまえて、作家自身による仕事の分類はここで見直されねばならない。つまり、ペレックの日常の探求を「社会学的」と一括するのではなく、むしろ「社会学的」側面こそがその探求の一面に過ぎないと認める必要があるのだ。

事実、自伝計画が放棄された後でも、「並以下の物事」の追究は、ペレック自身の実存を問う役割を担い続ける。その最も顕著な例を示すテキストとして、「私が1974年の1年間にむさぼった飲食物を列挙する試み」(« Tentative d'inventaire des aliments liquides et solides que j'ai ingurgités au cours de l'année mil neuf cent soixante quatorze », 1976) を挙げることができる¹⁵⁾。題名に偽りなく、それは1年間に摂取した飲食物をただただ羅列したリストに過ぎない。だがその陰には、ペレックのあらゆる自伝的行為を貫く動機が見出されるだろう。すなわち、過ぎた日々記憶が失われていくことへの恐怖、そして、依拠する記録を残さねばならないという強迫観念。ペレックは後に、これを次のように述懐している。

私は忘れることが怖くなっていた。まるで、全てを書き留めない限り、過ぎ去る人生の何ものも留めておけなくなるかのように。私は毎晩、綿密に、取りつかれたような意識で、日記のようなものを書くようになった。だが私記とは正反対に、そこには「客観的」な出来事のみを記録していった。起床時間、スケジュール、場所の移動、買い物、行数やページ数で示した仕事の進展、出会った人やただ見かけた人、どこかのレストランでとった夕食の詳細、読んだ本、聴いたレコード、観た映画、というように¹⁶⁾。

そうした日常的な行為や事物は、ここで忘却の恐怖の対象となることで、その相反する二面性を明らかにしている。極めて記憶から失われやすいということと、にもかかわらず失えば自己が留められぬほどに本質的だということだ。この儚さと根源性はまさしく、「何に注目すべきか」でペレックが「並以下の物事」に見ていた性質でもある。したがって一層、日常の探求の名の下に、この作家の社会学的な試みと自伝的なそれとは分ち難いものとなる。パリの描写が自伝計画『場所』から派生したのと同様、ペレックの社会的日常に対する執着の背景に見出せるのは、彼の自分自身の日常に対する意識、おそらくは、より切迫した意識なのだ。

そして、この自らの日々が記憶から失われることへの恐怖、つまり自らが失われる恐怖に、さらなる背景として、この作家の個人史における喪失が重ね合わされねばならないだろう。『Wあるいは子供の頃の思い出』(*W ou le souvenir d'enfance*, 1975) の自伝的記述が伝える通り、ユダヤ系の家庭に生まれ、幼くして戦争で父親を、ホロコーストで母親を失ったペレックには、両親と分かち合った日々の記憶が残されていない。写真や証言から歴史を再構築しようとしても、取り戻せるのはあまりに不確実で断片的な手がかりでしかない。あるいはペレックが集めようとする情報は時にひどく周辺の・間接的で、例えば図書館で古い新聞を渉猟して得た、自らの誕生日に世間で起きた出来事の記録といったものだ¹⁷⁾。こうした行為が、彼の生の根底に穿たれた欠落を埋め合わせることはあるまい。だが、自己存在の基礎を空虚に帰さないようにするために、せめても何らかの痕跡と周縁を書き記す試みは続けられねばならない。ペレックによる強迫的な日常の記録がなされるのは、これと同じ理念からなのだ。『さまざまな空間』(*Espèces d'espaces*, 1974) で述べられる通り、ペレックにとって書き留めることとはすなわち、「ひろがりゆく空虚からくっきりした断片を救いだし、どこかに、わだち、なごり、あかし、あるいはしるしをいくつか残すこと」に他ならない¹⁸⁾。そうした断片は、それ自体はどれほど卑小であったとしても、確かな痕跡として残る。また、同じく「並以下の物事」を拾い集めるパリの描写は、たとえ図書館で生まれた日の出来事を調べるように周辺的で間接的だとしても、自らの日常を——またそれが生まれ育った場所で行われる限り、自らの過去さえも——縁取るだろう。このようにして、社会の記述と個人の記憶は、ペレックにおいて表裏一体の問題を為す。

3 制約の継承

ただし、以上でこの作家における「社会学的」実践と自伝行為、ひいては文学的営為との一体性が示されたとしても、それはあくまで活動の動機・理念が同根でありうるという話に過ぎない。次の段階で検証されるべきは、その一体性は方法論の共有さえも伴う、ということだ。つまり、ペレックは日常の探求に文学的手法を持ち込むのであって、それこそが彼の社会学史上の独創性を保証していると言える。その一つは先述してきた列挙の手法で、これは終生ペレックの文体における最も一貫した特徴であり続けた¹⁹⁾。もう一つの手法は、彼の文学における最大の特徴と言えるかもしれない。問題となるのはすなわち、

「制約」の利用だ。

自伝計画『場所』に組み込まれた制約に関しては、先に概要を示した。各記述の遂行は、予め厳密に規定された時期と順序に従わなければならなかった。計画が放棄され、新たに「社会学的」実践としてサン＝シュルピス広場やマビヨン交差点での描写が行われる時、制約もまた変容する。

新たな規律は、記述の対象に関わる。『場所』の段階では、ペレックの「現場の描写」は主に静止した風景に照準を定めていた。計画の趣旨の一つが年月の経過による場所の変遷を見ることだったため、建物の並びや看板といったその場に固定された物が記録される必要があったのだろう²⁰⁾。これに対し、サン＝シュルピスやマビヨンでの新たな実践が対象とするのは、始めに示したように車や人の往来、すなわちその場から瞬く間に過ぎ去りゆく現象なのだ。同じく時の流れが枢要でありながら、自伝計画でのタイム・スケジュールの制約は、ここでリアル・タイムのそれに変わる。この速度の強制は、もう一つの取決め、すなわちサン＝シュルピスでの記述の題名に示されるような「パリのとある場所を網羅する試み」の下では、それほど安穩ではないだろう。だがこの制約こそが、視界の中で生じては消える小刻みな運動の記録を可能にしている。その刹那的な現象は、我々よりもはるか以前から存在し続けるサン＝シュルピス広場のような場所の磐石さと明確なコントラストをなしながらも、決して映えては見えない。強いられでもしない限り、あの名所旧跡と繁華な通りを組み合わせた場所で、つまりは他に見るべき（とされる）物事に事欠かない場所で、いったい誰が通りゆくバスやその番号の変化、行き交う人々やその表情に着目しようとするだろうか？

既に触れたように、またベルナール・マニエを始めとするペレック研究者が指摘してきたように、こうした日常の探求における制約の適用に関しては、その背景にペレックの文学的創作における方法論を認める必要がある²¹⁾。すなわち、描写の対象を運動する事象へと限定することは、母音のE無しで小説を書くのと同じく、意図的な制限によって通常では不可能な効果を実現する措置なのだ。そして以下で検証するように、その期待されている効果の内容に関してもまた、各活動の間で共通項を見出すことができる。

最初の「何に着目すべきか」からの引用でも示唆されていたことだが、ペレックは「並以下の物事」が我々の知覚と認識から逃れ去ろうとする点について、単にその物事自体が目を引きかないことよりも、我々がそれに目を向けようとし

ないことを問題視している。つまり、改められるべきは対象の無感興ではなく主体の無関心なのであって、ペレックの言うところでは、我々は反応の「条件付け conditionnement」どころかその麻痺に陥り、慣れ切った物事に改めて刮目する感受性を失ってしまっている。そこで、この習慣による無感覚から脱却する手がかりとして提示されるのが場所や対象を作為的に限定した記述なのであり、そうした処置をペレックはインタビュー等で「脱条件付け déconditionnement」と呼んでいる。

私の日常の「社会学」は分析ではなく記述の試み、より正確には、慣れ切ったがゆえに、あるいは慣れ切ったと思っているがゆえに見向きもせぬものの、通常いかなる言説でも扱われないものを記述する試みなのです。例えば、マビヨン交差点を通る車を列挙するといったように。[…] 問題となるのは、脱条件付けです。公的な（制度化した）言説が事件だとか重要事だとか呼ぶものではなく、その下にあるもの、並以下の物事、我々の日常を絶えず形成している奥底の物音を捉えようとするのです²²⁾。

マビヨンやサン＝シュルピスでの実践に導入されたリアル・タイムの記述という制約は、まさしくこの「脱条件化」を引き起こし、通常は無意識に過ぎ去りゆく事象に強制的に焦点を絞る手段だと言える。一方で、使用文字の制限などの文学的創作における制約、すなわち実験文学集団ウリボの一員として行使する方法論についてもまた、ペレックは同じ表現を用いる。

ウリボが目指しているのは、小説たるものを再検討し、作家を伝統的観念から「脱条件付け déconditionner」することです。[…] ウリボにおいて、我々は制約を出発点として作業を行います。その制約は、私を阻害するものではありません […]。それらは私自身の迷宮を解く鍵を与えてくれるのです²³⁾。

このように、その適用の場が文学的であれ社会学的であれ、ペレックが制約に求める効果は不変なのだ。すなわち、意識的な選択の束縛が逆説的にも、無意識に固着した体系からの解放をもたらすということ、そのようにして制約は、例えば「Eの失われたフランス語」において言語とその運用方法の潜在的側面を照らし出し、また一方で、同じくそれまでは潜在的に埋もれていた「並以下

の物事」をパリの街並から浮かび上がらせるフィルターとなる。この理念は、自伝計画『場所』においても同様だったろう。その厳密に細分化され、秩序立てられ、にもかかわらず完全に恣意的に見えるプログラムはまぎれもなく、ただ白い紙に向かうだけでは甦りようのない記憶、語られようのない潜在的な自己を、引きずり出し記述するために実行されたのだ。

このような発見の手法としての制約の役割は、ペレックが晩年の1980年から1981年にかけ雑誌『テレラマ』(Télérama)で連載していた記事『ペレック／リナシオン』(Perecrinations)において、特に顕著となる。この連載でペレックは、かねてから生業としていたクロスワード・パズルの出題と共に、パリの街の独創的な散策方法を読者に提案する。例えば、「12区のテルヌ通りからトリニテまで、名前がMから始まる通りのみを使って辿り着け」だとか、「名前がAから始まる通りを出発し、頭文字がアルファベット順になる道順を経て、Zから始まる通りに至るには」だとかいったものだ²⁴⁾。このウリボ的な言語遊戯を彷彿とさせる実用性の度外視も甚だしい制約は、まさしく実用的な効率や機能に従っては得られない発見へと導くだろう。確かにその発見は必ずしも華々しいものではないかもしれない、というのも、結局のところ問題になっているのは変わらず、日常に埋もれた潜在的な物事だからだ。だがその探求は少なくとも、当時のパリにZから始まる通りなど実は存在しなかった、といった事実は教えてくれる。

以上で示された、制約による知覚と認識の刷新は、どれほど奇抜で遊戯的に見えても、歴史を顧みれば様々な動向・流派と関連づけられる。詳細な比較検討は差し控えるが、例えば「脱条件付け déconditionnement」という表現は、ペレックに先立ちロラン・バルトがやはり既成概念や固定観念からの解放という意味で用いていた²⁵⁾。さらに系譜を遡れば、形式的手法の追究によって世界に対する人間の感受性を回復するという観念は、ブレヒトによる「異化作用」、そしてその基盤をなしたロシア・フォルマリズムの中核ヴィクトル・シクロフスキの「異化」理論に先達を見出すことができる。ここではただ次の点を確認しておくに留めよう。それでもペレックがこの系譜の中で特異な地位を占めねばならないのは、彼がしかじかの理念を芸術理論としてではなく実践例やその具体案として提示したこと、とりまなおさず読者によって実行され、共有されうる経験として受け渡したことによる。だからこそ「何に着目すべきか」は、提案として書かれる。「記述しよう」、「問いかけてみよう」というように。事

実、ペレックからの明白な影響下で現実の記述に着手するフランソワ・ボンなどの作家は、まさしくその提案を実行に移した読者の一人でもある²⁶⁾。確かに、ペレックによる日常の探求は彼固有の実存的な問題に根ざしており、制約の行使もまた、認識の対象ではなく認識のあり方に働きかける内向的な変革を目的としている。ペレックが外的な日常を通して問うているのは内的な自己に他ならないと言っていい。にもかかわらず、この探求は決して個別的な閉鎖性に陥ることなく、常に読者との共有に向けて開かれているのだ。

4 その後への継承

では最後に、文学的創作に由来する自伝計画や制約の理念に依拠したペレックの「社会学的」実践は、どのようにその後の創作活動に還元されたと言えるのか。

最初に言及した通り、『人生使用法』に見られる「並以下の物事」の目くるめく列挙は、そうしたフィードバックの現れと見なせる。ただしその背景で、日常の探求は執筆上の制約にも浸透している。この小説の各章で書かれるべき事柄は予め42種類の項目で規定されているのだが、大部分は登場人物の衣食住など、物語の背景をなす日常の構成に関わる。したがって、制約は「社会学的」実践では「並以下の物事」を記録するために用いられていたのに対し、ここではそれをフィクションに組み込むべく機能することになる。

こうしてこの小説には日常的事象が溢れかえり、過剰な集積による眩暈が生み出される。『人生使用法』を軸とした重大な変化は、ペレックがそのような列挙の幻惑を詩的效果として表明したことだ。実際に、数ページに及ぶ手仕事向け工具のリストは「一篇の詩として構成した」と述べているし²⁷⁾、また『人生使用法』に前後して、「私が1974年の1年間にむさぼった飲食物を列挙する試み」と、『場所』で行われた「現場の描写」の一つ²⁸⁾が発表されたのは、まぎれもなく詩の雑誌においてだった。ペレックがしばしばインタビューで「イペルレアリスム」と称される現代絵画の動向に重ね合わせて述べるように、記述の写実性は細密さの臨界点を越えた時に非現実的な夢幻性へと転ずる。こうした詩的追究は、日常の探求という理念と矛盾はしないだろう。示されているのはただ、表象という手続きにかけられる限り最も簡素な日常でさえも非日常的効果の源泉になりうる、という事実なのだ。そして、現実の記録から副次的に生じるその効果を、ペレックは『人生使用法』というフィクションで意識的に追

究するに至ったのだと言える。

日常の探求からの実践的な転用に関してはこのように『人生使用法』が典型的のだとしても、理念上の継承としては、最たる例にクロスワード・パズルを挙げたいと思う。先述した連載記事『ペレック／リナシオン』を含め、ペレックは様々な場でクロスワードを発表しているが、その出題傾向は以下の通り謀略に満ちている。「倒錯的な愛情を示した」(« Pratique l'amour vache »)のは誰か?²⁹⁾ 答えを得るには、« l'amour vache »を「倒錯的愛情」という慣用句としてではなく、字義通りに「牝牛の恋」と理解せねばならない。正解は« IO »で、なぜならギリシャ神話において「イオ」という名前は牝牛に変えられたゼウスの愛人を指すからだ。次は一度に3題示したい。« Cœur de lion »(「すさまじい勇氣」)、「Se termine avec brio »(「見事に終わるもの」)、「Morceau de brioche »(「ブリオッシュの断片」)³⁰⁾。答えは三つとも、同じく« IO »だ。求められる解法も同じで、習慣化した認識方法とは別の、そして目の前のものに対する最も率直な視点を用意せねばならない——« Cœur de lion »(「lionの中心」)、「Se termine avec brio »(「brioで終わりにくるもの」)、「Morceau de brioche »(「briocheの断片」)、というように。

ペレックは、日常の探求からクロスワード・パズルへの理念的な反映を確言はしていない。だが二つの活動における共通項は、次の言葉から示唆される。

結局のところ、クロスワード・パズルで良い問題文の特徴となるのは、その答えが明快だということ、そして明快なものにも関わらず、それを知るまでは全く解き得ないように思えることだ。ひとたび答えが見つければ、それが問題文自体の中にはっきり明記されていたことが分かる。しかし、我々はそれを見るすべを知らず、別様に見ることが問題だったということも³¹⁾。

「並以下の物事」と同じく、見出すべきものは始めから目の前にある。しかし、見方を変えない限りそれは見えない。問題となるのは再び、そうした「脱条件付け」による潜在的要素の発見なのだ。

よって、『ペレック／リナシオン』で見られるパリの散策方法への制約とクロスワード・パズルとの共存は、決して無償とは言えない。この二つのゲームは、各々が発見的手続きとして機能しながら、我々の——無論、いずれのゲームを実行するのも我々なのだから——認識の偏向を解体し、別様に物事を見る

すべを養わせるだろう。パリの描写に端を発した探求は、一方ではパリの新たな散策に、もう一方ではクロスワード・パズルへと波及し、ここで一体化を遂げている。単に晩年まで手がけられていた仕事だからという以上に、『ペレック／リナシオン』は、知覚と認識の刷新というペレックの試みが到達した終局的形態を示していると言っている。

おわりに

ペレックの「社会学的」実践を作家活動全体の枠組みで捉え直すことを目的とした以上の論考は、副次的にその活動分野の多様性を確認させる。無論、この多様性は散逸を意味しない。とりわけ制約の概念が常に紐帯の役割をなしていたのであり、それによって、ペレックの「社会学的」実践が制約を伴う自伝計画から派生し、新たな制約による展開を経て、再び制約を介して小説に還元され、クロスワードへと制約の理念を移植する、という見取り図が得られたものとする。

こうした検討は必然的に、ペレックが自らの仕事に設けた四つの分類、すなわち「社会学」「自伝」「小説」「遊戯」という区分を、土台として依拠しながら乗り越えるという試みでもあった。実のところペレックは、この「四つの領域、四つの問い方は結局、同じ問題を提起しているのかもしれない」、と述べている³²⁾。その「同じ問題」が何なのか、ペレックは明示していない。だが、もしも彼の営為の全てが帰納されるような一つの根本的な問題が存在するのだとしたら、それぞれの領域が提起し共有する主題、すなわち日常への認識、実存的問い、読者との連帯、制約の適用について、改めて包括的な考察を行う価値はあるだろう。その試みはまぎれもなく、パズルのピースのように多彩なペレックの活動に対して様々な組み合わせを試しながら、一枚の全体像を浮かび上がらせることに向かっているのだ。

(学習院大学大学院博士課程)

注

- 1) Georges Perec, *La Vie mode d'emploi*, Hachette, 1978, pp. 101-103 (chapitre 20), pp. 383-384 (chapitre 68) et pp. 536-539 (chapitre 94).
- 2) *Tentative d'épuisement d'un lieu parisien*, Christian Bourgois, 2008, p. 18.
- 3) « Inventaire », dans *Poésie ininterrompue. Inventaire*, Marseille, André Dimanche Editeur,

- p. 71 et p. 75.
- 4) « Approche de quoi ? », dans *L'Infra-ordinaire*, Seuil, 1989, p. 11. 邦訳は塩塚秀一郎訳（「何に着眼すべきか」、『水声通信』、第6号、水声社、2006年）を参照し、表現を適宜変更した。強調は引用者。
 - 5) Cf. Michel Sheringham, *Everyday Life : Theories and Practices from Surrealism to the Present*, New York, Oxford University Press, 2006, pp. 16-22.
 - 6) « Notes sur ce que je cherche », dans *Penser/Classer*, Seuil, 2003, p. 10.
 - 7) Michel Sheringham, *op. cit.* ; Derek Shilling, *Mémoires du quotidien : les lieux de Perec*, Villeneuve d'Ascq, Presses Universitaires du Septentrion, 2006.
 - 8) 『物の時代』が出版直後から東欧で盛んに翻訳されたのは、この一面を原因としている。Voir David Bellos, *Georges Perec : une vie dans les mots*, Seuil, 1993, pp. 342-344.
 - 9) ルフェーヴルの社会学と『物の時代』との関係については、SheringhamとShillingの掲書に詳しい。
 - 10) *Cause Commune*, n° 1, mai 1972, quatrième couverture.
 - 11) Voir Michel Sheringham, *op. cit.*, p. 141.
 - 12) *Tentative d'un lieu parisien*, *op. cit.*, p. 10.
 - 13) Cf. Georges Perec, *Espèces d'espaces*, Galilée, 2000, p. 110.
 - 14) « Tentative de description de quelques lieux parisiens » という総称は、まず1976年のテクスト「来るべき年月に向けた仕事の計画を記述する試み」（« Tentative de description d'un programme de travail pour les années à venir », in *Cahier Georges Perec 1*, P.O.L., 1985）の中で用いられた後、1978年に発表された先述の「Notes sur ce que je cherche」にて、「社会的」仕事の一項目として現れる。また、これと前後して断片的に公表された『場所』における「現場の描写」のタイトル・副題としても利用される。
 - 15) In *Action poétique*, n° 65, 1976.
 - 16) « Les Lieux d'une ruse », dans *Penser/Classer*, Seuil, 2003, p. 69.
 - 17) Cf. *W ou le souvenir d'enfance*, Gallimard, 2010, pp. 36-38.
 - 18) 『さまざまな空間』、塩塚秀一郎訳、水声社、2003年、p. 199。
 - 19) 代表的な例は以下にまとめられている。酒詰治男、「ペレックのリスト」、『年報フランス研究』、第30号、関西学院大学、1996年。
 - 20) 例えばヴィラン通りの描写では、幼少期に両親と暮らした家を含む建物の並びが番地ごとに記録されていく。「La rue Vilin », dans *L'Infra-ordinaire*, *op. cit.*
 - 21) Cf. Bernard Magné, « Carrefour Mabillon : "ce qui passe, passe" », in Georges Perec, *Poésie ininterrompue. Inventaire*, *op. cit.*, p. 62.
 - 22) « Entretien Perec / Jean-Marie Le Sidaner », dans *Entretiens et conférences*, vol. II, Nantes, Joseph K., 2003, p. 94. 強調は引用者。
 - 23) « Georges Perec : "J'ai fait imploser le roman" », dans *ibid.*, vol. I, pp. 245-246.
 - 24) Georges Perec, *Perec/rination*, Zulma, 1997, p. 56 et p. 60.
 - 25) Cf. Roland Barthes, « Littérature littéraire », dans *Œuvres Complètes II*, Seuil, 2002, p. 331 ; « Il n'y a pas d'école Robbe-Grillet », *ibid.*, p. 362.
 - 26) ボンの取り組みについては以下に詳しい。塩塚秀一郎、「フランソワ・ボンによる〈並以下のもの〉の探求」、『人文社会科学研究』、第52号、早稲田大学創造理工学部、

2012年。

- 27) « Un livre pour jouer avec », dans *Entretiens et conférences*, vol. I, *op. cit.*, p. 218.
- 28) « Stations Mabillon », in *Action poétique*, n° 81, mai 1980.
- 29) *Les Mots croisés*, P.O.L., 1999, p. 17.
- 30) *Ibid.*
- 31) *Ibid.*, p. 15.
- 32) « Notes sur ce que je cherche », *op. cit.*, pp. 9-10.